●世界経済論Ⅰ・Ⅱ
●開発経済論

矢野 修一 教授

【やの しゅういち】
1960年生れ。京大卒。京都大学博士（経済学）。カーステレオから流れる音楽はいろいろ。今も昔も変わらないのは、矢沢永吉、キャロル、そして時々、ちあきなおみとプレスリー。具体的に汗を流しもせず、勝手に限界を定めてるヤツは苦手。

「可能性」を育む「まだない」ものに向き合う

学部時代は武道、アルバイト、酒、バイク・ツーリング等々、「学生生活を謳歌した」と言えば聞こえはいいですが、要するにあまり勉強はしていませんでした（ゼミ生の前では大きな声で言いにくい！）。いろいろあって進学を決意したものの、不勉強な人間をすんなり入れてくれるほど、当時の大学院は甘くはなく、あえなく留年。経済原論、経済史、経済政策、英語、ドイツ語。出題範囲は限りなく広く、何が出題されるか分からない。先輩や仲間とともに勉強会をやり（週に1度は飲みながらの議論！）、翌年ようやく合格しました。

大学院では、A.O.ハーシュマンの研究とともに世界経済の歴史分析、現状分析を進めました。研究者として、世の中に最初に名前が出たのは1989年、スーザン・ストレンジの第一作、*Sterling and British Policy* の翻訳者としてです。恩師・本山美彦先生（現・大阪産業大学学長）らとの共訳でした。

ハーシュマンは、国際貿易、開発経済学、政治経済思想、組織論等、多岐にわたる著作を残しており、それに付き合う以上、こちらも広範な領域の研究が必要になります。おかげでいろいろな勉強をさせてもらいました。

ハーシュマンはそれぞれの著作がそれぞれの分野で評価されているものの、日本では、その全体像を研究成果としてまとめた人はいません。2004年の拙著『可能性の政治経済学』（法政大学出版局刊）が初の研究書です。また、私が2005年に翻訳した*Exit, Voice and Loyalty* は、彼の代表作のひとつで、経済学のみならず、経営学、政治学、社会学でも古典的評価を得ています。おかげさまで訳書『離脱・発言・忠誠』（ミネルヴァ書房刊）も増刷を重ねています。私にとって大きな研究成果としては、今のところ、これら2つが挙げられるでしょう。

政治的・歴史的要因を捨象した経済学、貨幣抜きで物々交換のごとく貿易を論じる国際経済学には、今も昔もなじめません。現在、ゼミで輪読しているのは、A.ウオルターとG.センの共著、*Analyzing the Global Political Economy*。国際政治経済学のテキストです。日本で言う「世界経済論」は、国際的には、“International Political Economy” という領域になるようです。

高経時代、矢野修一先生のもとで、世界経済論を中心にたくさんのことを学んだ。ゼミでは課題に真剣に取り組む態度を学んだように思う。幸か不幸か大学教師になってしまった私は、ゼミでの先生の様子を折に触れて懐かしく思い出す。学生と真摯に向き合い、その可能性を最大限引き出そうと努力されていた先生の姿は、教師としての私の原風景である。

2003年卒業。第36期体育会代表幹事。
一橋大学大学院特任講師。
2011年4月より下関市立大学准教授　山川　俊和

ゼミ生のひとこと